様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年　6 月　1 日現在

機関番号：32612
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010～2011
課題番号：22720144
研究課題名（和文）漢魏晋南北朝に於ける『山海経』の受容について－神話と政治・文学

研究課題名（英文）Reception of *Shanhaijing* in Han, Wei, and Southern and Northern Dynasties Periods-Myths, and Politics and Literature

研究代表者
松浦　史子（MATSUURA　FUMIKO）
慶應義塾大学・商学部・講師（非常勤）
研究者番号：80570952

研究成果の概要（和文）：中国最古の神話的地誌『山海経』が、動乱の漢末～魏晋南北朝の政治・文学に如何なる影響を与えたのかを、文献と図像の双方から総合的に考察。検討の結果、例えば、『山海経』にも所録される鳳凰について、本来、鳳凰と共に五方の神鳥であった「鳳凰に似る四羽（發明・焦明・〈粛＋鳥/霜＋鳥〉・幽昌）」が、漢以降の政治的情勢を反映して凶兆の要素を帯びるに至った来歴を、中国周辺部のみに現存する各種瑞祥志を手がかりに明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Based on both texts and images, we extensively examine how *Shanhaijing*, China’s oldest mythological treatise on geography, affected politics and literature in the late Han, Wei, Jin, and Southern and Northern Dynasties Periods that underwent massive upheavals. For example, we refer to several records on auspices that are existent only in areas surrounding China, and reveal how political situations in the Han period and later transformed “four fenghuang-like birds (faming, jiaoming, sushuang and youchang)” into inauspicious birds although they used to be among five divine birds including fenghuang, which is also described in *Shanhaijing*.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論
キーワード：『山海経』、漢魏晋南北朝、前田尊経閣文庫本『天地瑞祥志』、ペリオ文書「瑞応図」、五鳳、神話と政治、瑞祥と災異、發明・焦明・〈粛＋鳥/霜＋鳥〉・幽昌

１．研究開始当初の背景

天下第一の奇書と称される『山海経』の研究は、当初の持つ博物書的正確から、地理歴史・思想・文学・美術・民俗民族学など多分野に亘り、すでに層の厚い研究が存在する。しかしこの書物が動乱の漢～南北朝時代の文学に於いて如何に受容されたのかを通史的に追う試みは稀少である。

通史的にみて『山海経』に基づく文学として著名なのは、郭璞『山海経図讃』と陶淵明「読『山海経』」という六朝文学である。松浦（2002~）はこのような六朝時代に『山海

経』に深く関わった文学者として、従来の『山海経』受容史でも看過されてきた六朝末の詩人・江淹に着目し、従来空白状態であった六朝末の『山海経』受容の一形態を明らかにした。江淹が『山海経』最古の注釈者である六朝始めの東晋・郭璞の神仙的文学を継承することは既に高橋和巳（1967）や曹道衡（1984）によって指摘されるが、江淹と『山海経』の具体的関わりについては十分に研究されていない。これに対し申請者は、江淹が『山海経』と郭璞注の欠を補う為に、『赤県経』という作品を手がけたという史伝に着目し、その『赤県経』に比定される「遂古篇」という作品の検討を行った。その結果明らかになったのは、当該作品が、史書の辺疆誌の情報等を以て『山海経』の奇異な世界の実在を証明せんとする郭璞『山海経』注の実証的精神を継承すること、郭璞『山海経』注に欠ける域外の情報、仏教的世界などを補填する学術的試みであったという事である【拙稿「江淹「遂古篇」について－郭璞『山海経』注との関わりを中心に」2007.3】。

六朝始めの博物学者・郭璞は、『山海経』の最古の注釈者である。しかし、郭璞が『山海経』に基づき作成した『山海経図讃』（うち３０３編が現存）に関する専論は、国内外ともに僅少であり、さらに『山海経図讃』の一編一編を精読した研究は皆無である。これに対し申請者は、「水の霊府」という特異な語を読む『山海経図讃』「崑崙丘」を精読し、郭璞が「崑崙」を中心とする広大な水の宇宙観を構想していたことを明らかにした【拙稿「崑崙と水－郭璞『山海経図讃』「崑崙丘」にみる水の宇宙観」2006.3】。以上が、申請者による博士論文「六朝文学に於ける『山海経』の受容について－」（2009 於東京大学、博士学位授与）の成果の一部である。

郭璞『山海経図讃』や陶淵明「読『山海経』」は『山海経』の“図像”に基づき作製されたものである。しかし、『山海経』の図像に関する本格的検討は、近年、神話学の大家である中国社会科学院文学研究所・元教授・馬昌儀氏によって始められた明以降の『山海経』図像研究に留まる（2000,2002,2006）。これに対し申請者は、主に、郭璞が眼にした『山海経』「古図」の原貌を探るため、日本学術振興会の特別研究員奨励費（DC2-PD）等を用いて、東京大学東洋文化研究所教授・小川裕充氏（中国美術史）に師事しつつ、現地文物局の協力のもと、主に漢代に多く作製された石のレリーフ・画像石に彫刻される『山海経』の神話的図像を系統的に調査してきた。さらに、日本のみに現存する唐代の図像つきの瑞祥志『天地瑞祥志』（財団法人・前田育徳会・尊経閣文庫蔵）の研究をも進めており、これらの調査を通じては、例えば『山海経』では原始的な異獣であった「九尾狐」が漢の讖緯思想の元に瑞獣化すること、それを承け郭璞『山海経図讃』にも東晋王朝の正統性を保証するための重要な「瑞獣」として描かれたこと、さらには日本に於ける『山海経』の異獣の受容も、『山海経』に見る異獣を瑞獣として解釈する郭璞の『山海経』受容の影響が強いこと等を確認した。

２．研究の目的

申請者による従来の「六朝文学に於ける『山海経』受容研究」を基盤として、以下の文学作品を中心に、漢魏晋南北朝時代の『山海経』の受容について、図像と文献の双方から総合的に検討する。

（１）郭璞『山海経図讃』についての検討。

当該作品については、魏晋南北朝時代の政治と密接に関わる「瑞祥」を中心に考察する。

後漢の王莽が瑞祥「白雉」の出現を掲げて天下を簒奪した事は知られるが、漢末から魏晋南北朝にかけて、短命の王朝の正統性を保証するための「異形」の瑞祥は急増した。こうした政治的背景の下、『山海経』の原始的な異獣・異形の神々のうち、先述の「九尾の狐」の他、郭璞『山海経図讃』の段階で、新たな瑞祥観念が賦される「異形」の異獣や神は少なくないが、その殆どが未検討のままである。（目下、『山海経図讃』の一編一編を精読する試みは申請者による研究に留まっている。【松浦 2006】）。よって、本研究では、漢魏晋の考古遺物（出土物）に多く見える瑞祥図に於いて、『山海経』由来の異獣・神々が少なからず描かれること、「瑞祥」情報を載せる「緯書（図讖）」が、郭璞『山海経』注釈に多く引用される点、などに着目しつつ、『山海経図讃』の瑞祥観念について、「図像と文献」の双方から検討する。

（２）漢魏晋南北朝時代の志怪書にみる『山海経』の記載の検討。

漢魏晋南北朝に多く編まれた怪異の記録書「志怪書」には、既に『山海経』からの影響が指摘される。しかし、志怪書の『山海経』的博物・異域に関する系統的研究はないため、本研究では、漢以降の志怪書のうち『山海経』を継承する博物記載を網羅的に洗い出し、その博物・異域の選択および受容形態のうちに、各志怪書とその作者の国家観・世界観を探る。

（３）中国周辺部のみに現存する瑞祥志にみる『山海経』の記載の検討。

従来の『山海経』研究では、多くの王朝が乱立した六朝末に掛けてとくに多く作成された一連の「瑞祥志」に見る該書の受容研究は殆どない。しかし、とくに中国周辺地域のみに現存する瑞祥志・敦煌・唐『瑞応図』（亀・

龍・鳳のみ現存、一部除き未解読）や、日本・唐『天地瑞祥志』（最善本である前田尊経閣文庫本の二十巻のうち、一、七、十二、十三、十四、十六、十七、十八、十九、二十が現存。一、七、十二以外は、未翻刻の状況）には、『山海経』に関する記述も少なくない。よって、国内外初の試みとしてその記載整理を行い、動乱の時代に多く編纂された「瑞祥志」にみる『山海経』の受容状況を探る。

３．研究の方法

「文献」と「図像」の相互照射による方法を採る。

近年、中国社会科学院の馬昌儀氏により、本格的な『山海経』図像研究が開始されたものの、その対象は明代以降の図像を中心とする。これに対して、六朝時代の郭璞や陶淵明がみたとされる「『山海経』古図」の原貌をさぐるための有効資料として馬昌儀氏も注目するのが、漢代に多く作製された石のレリーフ・画像石だが、既に厚い層のある漢画像石研究の成果は、必ずしも『山海経』研究に十分に反映されているとは言い難い。

このような状況を踏まえ、申請者はここ数年来、郭璞『山海経図讃』の図像的側面を探るため、漢代画像石に刻まれる『山海経』に関連する図像の系統的調査を行ってきた。

本研究で新たに注目するのは、山東省武氏祠堂・後漢時代画像石を始め、漢魏晋の画像石・壁画にみる瑞祥図には、『山海経』の異獣や神格に関する経文が刻まれる作例が少なくない点である。この事は、『山海経』にみるいくつかの原始的な異獣や神格が、漢以降に興隆した讖緯思想の下、「瑞祥」として受容されていった可能性を示すだろう。このような推測に基づき、本研究では、申請者による従来の『山海経』図像に関する漢代画像石研究を継承しつつ、検討の対象を、さらに、漢魏晋の壁画にみる神話・神仙・瑞祥図に拡張する。またこの一連の図像調査の成果は、漢以降の『山海経』に関する文献資料に合わせ、漢魏晋南北朝時代における『山海経』受容の実態について、総合的に把握してゆく。

■平成２２年度

文献調査：

まず、基礎的文献作業として、郭璞『山海経図讃』、漢魏晋南北朝時代の志怪書について検討する。

（１）**郭璞『山海経図讃』**にみる瑞祥観として特に注目するのは、「瑞祥としての玉女」である。

（２）漢以降、郭璞・陶淵明を経て江淹に至るまで、『山海経』が与えた影響は、韻文作品のほかに、**博物書・地理書・志怪書・瑞祥志**などに見ることができる。

とくに漢魏晋南北朝時代に成立した志怪書の筆法は、形態的特徴・生態などを誌す『山海経』のそれに一致し、『山海経』の異域・異物等を踏襲した博物的描写がなされる。こうした『山海経』の博物的描写の系譜にあるものとしては、漢・東方朔『神異経』『十州記』、漢・郭憲『洞冥記』、魏・張華『博物誌』、晋・郭璞『玄中記』など、「図像」に基づくものとしては、『外国図』『括地図』などが有り、また前秦・王嘉『拾遺記』や北魏・酈道元『水経注』等の北朝の志怪的地理書も同じ『山海経』の系譜にあるとされているものの、従来の志怪書研究に於いては、これらに関する系統的研究はない。よって本研究では、志怪書に見る『山海経』の博物記載（異域・異物等）に的を絞り、①『山海経』原文をそのまま引用する、或いは、換骨奪胎した博物、②各書物に共通する、あるいは独自の博物等を割り出し、漢以降の『山海経』受容の実態を探る。

図像調査：

一連の基礎的文献作業と同時並行的に、平成 22 年度には、夏期・秋期の二度に分けて、申請者がこれまでの図像調査で培ってきた博物館・文物研究所などの人脈、および東京大学東洋文化研究所教授・小川裕充氏（中国美術史）などの下で会得してきた図像学の知識を活かし、中国大陸でのフィールド図像調査を行う。

現在、中国に於ける考古遺物の保存状態は必ずしも良好とは言えず、場所によっては野外に設置・放置されたままの状況にあり、劣化のすすむものも少なくない。実際、これまでに申請者が、山東省済寧博物館、臨沂博物館、白集漢墓、茅村漢墓などで行ったことのある漢代画像石調査では、数百点に亘る貴重な漢代画像石が野外に放置されたまま、風化の加速する現状を目の当たりにした。この様な状況下、漢魏晋時代の画像石・壁画の調査の主たる目的は、詳密な図像の調査・記録作業となる。具体的方法としては、書き起こし図を用いた記録のほか、高感度・高画質のデジタルカメラの撮影による保存を行う。

平成２２年度中には、まず前半期に、河西地域出土の魏晋画像墓を調査する。敦煌研究院副院長・王旭東氏の協力の下、甘粛省・佛爺廟湾魏晋墓にみる『山海経』の傍題付きの「瑞獣」、酒泉丁家閘五胡十六国墓にみる『山海経』に関連する瑞獣・神格の図像調査を行う。さらに後半期には、現存する数少ない六朝末の瑞祥図として貴重な『瑞応図』（ペリオ文書 No2683、フランス国立図書館蔵）に描かれる、『山海経』に関する一群の瑞獣の図像・経文を調査する。

これらの神話神仙・瑞祥図像調査の成果は、申請者による基礎的文献作業に併せ、解析を試みる。一連の研究成果は、中国社会科学院

教授・葉舒憲氏の紹介による、台湾・中興大学での国際神話学会において報告を行い、各分野の専門家の考査を経たのち、論文化を進める。

■平成２３年度

文献調査：

昨年度までの調査の記録整理を続行させる。

図像調査：

まず、漢代の政治・文化的中心地であった陝西省・河南省出土の漢代画像石を調査する。特に、楚の文化圏に隣接する河南省南陽・新野一帯からは、多く神話・神仙・瑞祥図が出土するため、一定の滞在期間が必要である。また、陝西省の北部一帯～内モンゴル一帯から出土した漢以降の画像墓には、中国最古の神話的地誌『山海経』の異獣・神格が瑞祥として描かれることが少なくないが、従来の漢画像石研究および瑞祥図研究（林 1974、田中 1984、巫鴻 1989、佐原 1991、管野 2003,08）に於いても、『山海経』との関わりに言及するのは巫鴻氏に留まる。これらの点を踏まえ、後半期にはとくに中国北部の漢魏晋十六国墓に描かれる神話・瑞祥的図像について、主に『山海経』との関わりから検討を行う。

一連の研究成果は、各文化の師事を仰いだ後、論文化を進める。また本研究の総括として、漢魏晋南北朝時代における『山海経』受容の継承関係などを押さえつつ、未曾有の大動乱期であった該期を活きた人々の、域外に対する観念・国家観について通史的に整理してゆく。

４．研究成果

文献研究

往古の風神である「鳳凰」が、道家思想の影響を受けつつ『山海経』に書き留められた過程については、すでに松田稔氏(1984)によって明らかにされている。これを踏まえ本研究では、漢以降、動乱の六朝を経て唐代に欠けて成立した一連の瑞祥志（中国周辺部にのみ現存する各種瑞祥志：前田尊経閣文庫本『天地瑞祥志』、ペリオ文書『瑞応図』等 ）の「鳳凰」の項目の冒頭に重要な瑞祥として所録される、「鳳凰に似る四羽の凶鳥（發明・焦明・〈粛＋鳥/霜＋鳥〉・幽昌）」の存在に着目し、各種文献（史書・緯書など）の関連記載を手がかりに、この四凶鳥の成立過程と受容について検討した。その結果、本来は、「鳳凰」と併せて「五方の神鳥」であった發明・焦明・〈粛＋鳥/霜＋鳥〉・幽昌が、「鳳凰の出現（による改元）にもかかわらず、王朝は滅んだ」という凶事の続いた魏晋六朝時代の政治的事情を承け、凶兆としての要素が付加され、六朝末から唐代に掛けて成立した多くの瑞祥志（図）の「鳳凰」の冒頭に所載されるほどに重要、かつ看過できない瑞祥となるに至ったものと結論した。

とくに、現在、日本にのみ保存される前田尊経閣文庫本『天地瑞祥志』第十九「禽」の冒頭に「鳳凰」に続いて所録される「發明・焦明・〈粛＋鳥/霜＋鳥〉・幽昌」の存在については、これまで国内共に関連分野（歴史・美術・文学・思想・民俗民族学）に於いて殆ど採り上げられることは無く、この四羽凶鳥の来歴と受容の状況が明らかになった点は、大きな成果であると言える。

さらに図像的側面の成果としては、上述の文献調査を踏まえ、前田尊経閣文庫本『天地瑞祥志』第十九「禽」の冒頭部のこの四羽が描かれていたと思われる空白部分に於いて、敦煌出土ペリオ文書「瑞応図」（No2683）の「鳳凰」の項目の冒頭にみる「發明・焦明・〈粛＋鳥/霜＋鳥〉・幽昌」の図像に似たものが描かれていた可能性を推測した点を特筆したい。これまで、中国周辺部にのみ保存される瑞祥志（図）についての相互比較は殆ど行われたことは無い。これに対し、前田尊経閣文庫本・唐『天地瑞祥志』の記載情報と、中国敦煌出土・ペリオ文書・六朝～唐写本『瑞応図』の本格的な比較は、本研究が国内外ともに初の試みとなる。

なお 2011 年の始めに、中国に於いて『天地瑞祥志』の京大本（昭和写本）が発刊・流通し始めた状況にあっては（李鳳等『稀見唐代天文史料三種』国家図書館出版社 2011）、今後、日本の研究者による、『天地瑞祥志』の最善本である前田尊経閣文庫本（江戸写本）の研究は、喫緊の課題となるであろう。

（当該研究は 2009 年 12 月、中国社会科学院文学研究所・葉舒憲教授の招聘により参加した、台湾国立中興大学での「新世紀神話研究之反思」国際学術研討会の学会発表に基づく。論文のネイテイブチェックについては、台湾中央研究院・博士後研究員の林桂如氏、関西学院大学・専任講師の鄧芳氏、東京理科大学・非常勤講師の郎潔氏の助力を得た。）

図像研究（フィールド調査）：

（１）海寧出土・後漢（三国）時代・画像石墓にみる瑞祥図の現地フィールド調査。

（2010 年９月４日～８日）

（図像の現地調査にあたっては、中国側の研究協力者として、山東省石刻芸術博物館・楊愛国副館長、杭州師範大学美術研究院・黄雅峰所長、海寧市博物館・許賽君所長及び海寧中学校長の多大なる助力を得た。また一連の調査は、福田素子〔青山学院大学非常勤講師・中国文学〕、富田美智恵〔流通経済大学教育学習支援センター・専任講師〕、友田真

理〔早稲田大学美術史・博士後期課程在籍〕とともに行った。）

海寧漢（三国）画像石墓については、国内の画像石研究者間でも、未だ調査の困難な対象として知られ、十分な調査は行われていない。しかし本研究では上述の方々の厚誼を得、幸いにも現地調査を施行することができた。調査の対象は、北壁・西壁に刻まれる瑞祥図だが、他の一般的な漢画像石墓に比べて比較的浅い位置に造営される点、さらには江海に隣接し潮風の影響を受けやすい点などの立地条件ゆえに、該墓の図像は剥落・劣化が酷く、殆ど判読の不能なものも多く見受けられた。とくに西壁の瑞祥図の劣化が酷く、『山海経』の異獣に比定される「六足獣」の足の数なども、殆ど判別が不能の状況であった。該墓の瑞祥図については、可及的速やかな情報収集およびその研究が求められる。

（２）陝北・神木大保当・後漢画像石墓のフィールド調査。

（2011 年 8 月 16 日～21 日。）

（図像の現地調査にあたっては、山東省石刻芸術博物館・楊愛国副院長、陝西考古研究院・王煒林院長、楡林市文物保護研究所・袁政氏ほか研究員の多大なる助力を得た。一連の調査は、福田素子〔青山学院大学非常勤講師・中国文学〕、山崎藍〔日本学術振興会 PD 特別研究員〕、友田真理〔早稲田大学美術史・博士後期課程在籍〕と共に行った。 ）。

神話・神仙的な瑞祥図が少なからず出土する中国の陝西省北部（神木大保当、楡林、米脂一帯出土のものを中心とする）出土の漢代画像石の調査を行った。調査の対象としては、西方的なモチーフを持つ神話・神仙図像にみる「有翼の白馬朱鬣」を採り上げ、その名称・性格について検討した。とくにこの地域の神話・神仙的な画像石には、西方的モチーフと共に、有翼の白馬の図像が描かれることに留意し、それが『山海経』所載の、周王の徳によって西方・犬戎国から献納された白身朱鬣の神馬・吉量（吉良）であると推定した。

以上の調査成果については、今後、論文化を試みる予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

①<u>松浦史子</u>「関於瑞祥志中可見的似鳳四凶鳥（發明、焦明、鸛鵶、幽昌）之来歴－以日本前田尊経閣文庫本『天地瑞祥志』引『楽斗図』為端緒」（台湾国立中興大学『新世紀神話研究之反思国際研討会論文集』（2011.3：査読あり） pp,331～360

６．研究組織

(1)研究代表者

松浦 史子 （MATSUURA FUMIKO）

慶應義塾大学・商学部・講師（非常勤）

研究者番号：80570952